

「ハルさんの決めぜりふ」

ゴミ収集日の朝、ゴミ置き場の前で背後から声がした。

「あんた、もう健診に行つたんかな」

振り返ると、村姑のおせつかいハルさんがいた。捕まったら最後、言い逃れることは出来ない。

「いえ、まだ」と、言い終わらぬうちに、「何をぐずぐずしとるんじや、早う行つて来んさい」。「は、はい」

年輩のハルさんに叱咤されると、「はい」としか言えません。私は、その日のうちに、人間ドック健診センターに電話して、予約を取り付けた。

市街地から遠く、農家の多いこの村は、健診とはあまり縁のない環境でした。私も、以前受けた人間ドック健診は、パートで働いていた十数年も

前のことで、以来、一度も受けてはいませんでした。しかし今は、村姑ハルさんのおかげで、毎年、人間ドック健診を欠かすことはありません。

ハルばあさんのうるさい姑口に、村の人達が皆素直に従うのには訳がありました。

ハルさんが、県北の寒村からこの村に嫁に来る数年前に、彼女の両親は相次いでガンで他界し、残るたった一人の姉も、手遅れから乳ガンが肺に転移し、若くして亡くなったそうです。

1人ぼっちになったハルさんは、親戚の家から、縁あってこの村に嫁いで来たのです。子供も授かり、幸せな暮らしてしたが、両親と姉の死は片時も頭を離れることはなく、「ガン」の二文字は、決して消し去ることは出来なかつたそうです。

守るべき家族も出来た彼女は、健康管理には人一倍気を配り、一年一度の健康診断も欠かすことはなかつた。

ガン検診などという言葉すら、まだ一般的ではなかつた時代に、一日がかりで、遠い町の病院へ出かけて行くのは、容易なことではなかつたでしょう。

早朝、始発のバスに乗るために、バス停までの三キロの道程を急ぐハルさんを見て、「なんと暇人なことよなあ」「なんと結構なご身分ですことよなあ」と、村の口さがない人達は陰口をたたいた。何と言われようと、意志を貫いてきたハルさんを支えたものは、亡き両親と姉から託された、死んではならぬという、強い思いだったので。

ハルさんに異変がおきたのは、還暦も過ぎ穏やかな老後を送っていた頃。

その年の人間ドック健診で、乳ガン要再検査の結果が届いたのだった。ハルさんは、驚きも、うろたえもしなかつた。

「来るものが来たか」と、精密検査に臨んだのでした。

「ガンを迎え撃つ心の準備は、ずっと前から出来ていた」と。

精密検査の結果は、ごく初期段階の乳ガンと診断され、直ちに手術を受けた。その後、ホルモン剤治療が数年続き、節目と言われる五年も無事乗り越えた。

「もう薬も、飲んでもええようになったんじやよ」

村の人達に誇らしげに話すハルさんは、ガンを克服した喜びと自信に満ちあふれていた。

「こうやって皆と笑うておられるのも、早うにガンを見つけたからじや。いや、見つけてもろうたからじや」

ハルさんの熱弁を、皆うなずきながら聞いていた。

「はじめは痒うも痒うもないから気がつかんのじや。気が付かんままおつたら、今こうやって笑うてもおられんかつたろうに」。まだ続いた。

「何ともない内に見つけにやおえんぞな、早期発見じやよ、早期発見、早期治療じやよ」。ハルさんのいつもの決めぜりふに、皆もつられて大いに笑った。

彼女の貴重な体験があつたからこそ、村姑おせつかいハルさんの誕生となつたのです。説得力のあるハルさんの言葉には、自身が、ガンを克服したという確かな事実があり、「この村からは、手遅れで死ぬ人を一人も出さない」という強い思いがありました。

若い日に、両親と姉をガンで失い、そして我身もガンに。しかしハルさんは、決して運命だから仕方がない、できらめる人ではなかつた。人を苦しめる病に、真つ向から戦いを挑んでいるのです。「早期発見」という、伝家の宝刀を引っさげて、「どこからでもかかって来い」と立ち向かっているのです。

「健診に行つたんかな、みんな行かんとおえんよ——」。

今日も、ハルさんが村中を走っている足音が聞こえる。